

「釜ヶ崎での社会学」について

島 和博

私が釜ヶ崎という「場所」（岩田正美が人々の「生きている場所」と呼んだ、そのような「場所」）とつきあいはじめたからほぼ二〇年になります。そして、この二〇年という時間は、同時に私が社会学をやつてきた（Doing Sociology）時間とほぼ重なっています。もちろん、釜ヶ崎とのつきあいのすべてが社会学の学習者あるいは研究者・調査者としてのそれであつたわけではないのですが、それでも私が社会学という学問を学び、それを仕事とするようになつて現在に至るまでの二〇年間において、釜ヶ崎はつねに私が社会について何事かを考えたり語つたりする場合の主要な参照の場であり、さらには検証の場であつたという意味で、私の社会学はほとんど釜ヶ崎での社会学だったのではないかと、今では思っています。

釜ヶ崎という「場所」から社会的な諸現実や出来事を見る、そしてそれらの意味を釜ヶ崎の現実に引き寄せて考える、そうしたことがいつのまにかほとんど習い性になつてしているので

すが、その意味では釜ヶ崎は私にとってほとんど唯一の「社会認識の現場」であるともいえるのですが、それでは改めて「なぜ釜ヶ崎なのか」と自問すると、その答えは容易には思い付きません。西澤晃彦は『純粹な都市』の神話に強い違和を感じる者が、ある時代においては、寄せ場へと辿り着くことはわりやすい必然であった」と書いていますが、こうした記述を読むと、「純粹な都市」の神話に強い違和を感じたかどうかは別として、なるほど、私もまた時代の状況に対する何ほどかの「違和」を抱えつつ、同時に時代の「必然」に促されもして寄せ場（釜ヶ崎）へとたどりついたのかと、妙に納得しないでもないのですが、しかしそれでも「時代の必然」と割り切って納得してしまうことのできない、釜ヶ崎という「場所」や寄せ場の日雇労働者という「他者」への私自身の「こだわり」のようなものもあります。たとえそれが私の多分に空疎な観念や妄想の投射に、あるいは「淫らな好奇心」に、根ざしたものであつたとしても、この「こだわり」こそが、現在にいたるまでのほぼ二〇年間、私を釜ヶ崎に繋ぎとめてきたものであつたとすれば、そのこだわりの内実が反省的に探られる必要もまたあるだろうと考えています。

釜ヶ崎（に代表される「寄せ場」）をもつぱら社会解体地域、病理の集積地と（のみ）みなす「古典的な」社会病理学はすでに批判しつくされ、その妥当性は理論面でもイデオロギー面でも否定されてしまったとはいえ、しかしそれでもやはり

釜ヶ崎はその多様多彩な「病理」のあからさまな露出によつて、私をそこへとひきつけています。たしかに、私自身の日々の生活実感からすれば、もはやマルクスの窮乏化論でもあるまい、というのが正直なところなのですが、しかし釜ヶ崎に

一步足を踏み入れると、そこが依然として「社会体制の病理」（仲村祥一）のもつとも visible な場であることを痛烈に思い知らされ、私の日常の「安樂」（藤田省三）と釜ヶ崎の現実とのあいだのこの落差は一体何だろうと、今でもどうしても腑に落ちず、このことが私を幾分か不安にもさせます。たとえば、地区内に充満するアルコールと排泄物・吐瀉物の「異臭」からはじまって、食中毒と餓死のどちらを選ぶかと選択のために二時間三時間と辛抱強く待ち続ける数百人の労働者の列、西成警察署のすぐそばで堂々と営業している路上賭博やノミ屋、誰彼と見境なく合図を送る覚醒剤の売人、労働者の不穏な動きを二四時間監視するビデオカメラ、そして時として起きた暴動にいたるまで、これらが本当の現実であるとすれば、逆に、私（たち）のそれなりに「豊かな」生活とそこでの日常的な諸実感は、そのリアリティが疑わしく思えてくるのです。市村弘正は「自己が属する集団の『豊かさ』における一体感」こそが「貧民」の視界からの脱落^③を担保していると述べていますが、釜ヶ崎は、そのあまりにもあからさまな貧困と病理の露出によって、私（たち）のこの危

博やノミ屋、誰彼と見境なく合図を送る覚醒剤の売人、労働者の不穏な動きを二四時間監視するビデオカメラ、そして時として起きた暴動にいたるまで、これらが本当の現実であるとすれば、逆に、私（たち）のそれなりに「豊かな」生活とそこでの日常的な諸実感は、そのリアリティが疑わしく思えてくるのです。市村弘正は「自己が属する集団の『豊かさ』における一体感」こそが「貧民」の視界からの脱落^③を担保していると述べていますが、釜ヶ崎は、そのあまりにもあからさまな貧困と病理の露出によって、私（たち）のこの危

現実が集積する場所でもあったのです。（そして今でもそうです）。

たとえば、誰かに「寄り添う」ことがそのままただちに別の誰かとの敵対を引き起こすような、複雑に錯綜した政治と利害の対立状況があり、あるいはまた、何の腹のたしにもならない「人間的な」会話などアリミ缶一個ほどの値打ちもないとみる厳しいリアリズムもあって、釜ヶ崎の現実を自分自身の肉眼と言葉で透視し、つかみることは容易ではあります。そうかと思えばもう一方では、旺盛なサービス精神と巧みなストーリー・テリングで、私が聞きたい話を暇つぶしに語ってくれる親切な労働者もいて、観察しているつもりが本当は観察されていたという、研究者・調査者としては笑えない経験も一度や二度ではなく、そこでは生半可な「フィールドワークの技法」や小賢しい「ラポール」の工夫など物笑いの種でしかない、といった現実があります。

もちろん、私はここで、ことさら釜ヶ崎の「病理」と「逸脱」の諸現実をこれでもかと持ち出すことによって、釜ヶ崎の「特殊性」を強調したいわけではないし、あるいはまた、社会学理論やフィールドワークなど釜ヶ崎の過酷な現実に通用するものかと、そのひ弱さと甘さを指摘しようというのでもありません。病理と逸脱の現実であれば、むしろ釜ヶ崎の「外」にこそもっと残酷で多様に、そしてさらに豊富にあるのではなかいかと私は思っています。そうではなく、釜ヶ崎ではその

うい「一体感」をその奥深いところで揺さぶります。

さらには、こうした釜ヶ崎の諸現実は、社会学（研究者）もまた「安樂への隸属」へと知らず知らずのうちに傾斜しているのではないかということを思い知らせてくれます。釜ヶ崎での社会学を通じて、私が学んだことは何かといえば、それは他ならぬ釜ヶ崎で「社会学すること」の難しさであり、さらにいえば社会学の無力さとそのまやかしではなかったかという気がしています。釜ヶ崎にはたとえば、問題は「構築」されたものといったスマートなはぐらかしや、「理解」と「解釈」の社会学的テクニックではどうてい太刀打ちできそうもない、それゆえ対象認識への意欲そのものをしばしば萎えさせれるような、病理と逸脱の現実があり、そしてそのことが私たち（たち）のうちに釜ヶ崎を特殊・例外の場所と見て「あちら側」へ隔離しようとする無意識の認識姿勢をもたらしているよう思えます。

私自身がはたして社会学研究者として、あるいは調査者としてどれほどきちんと釜ヶ崎の現実に向かい合ってきたのかという反省はもちろん残されてはいるのですが、今はこのことを棚上げしてあえていうならば、私にとつて釜ヶ崎という場所は、私の社会学研究者あるいは調査者としての「調べようとする」あるいは「知りたい」という欲求や思惑を、そう容易に受けつけてはくれない複雑で暗晦な場所であり、同時に、その理解と解釈を祛ませるようなむき出しのハードな諸

病理と逸脱が、圧倒的な物質性を伴つて、それゆえ「どのような観念操作や解釈の工夫によつても覆い隠すことのできないモノとして、私（たち）の目の前に突き付けられてくるということを指摘したいのです。そして、このような物質性あるいは固さに対して、社会学は、とりわけ「理解」と「解釈」をその主要な認識の武器とするフィールドワークは、はたして対抗できるのだろうかと疑つてているのです。

病理も逸脱も、それが上手にカモフラージュされ、ソフトな文化的装いでシューガーコーティングされ、あるいは権力と制度によつて私たちの目の届かない場所に秘匿されているのであれば、私たちはそれとなんとかつきあうことはできるし、うまくすれば一定の枠内でその経験を「共有」し、そこには「理解」と「共感」が生まれることを期待もできます。しかし、釜ヶ崎にはそのようなゆとりと寛容の領域は存在しません。たしかに、炊き出しの行列に並ぶ労働者の、炊き出しへの「意味づけ」を「理解」し、それを「抽出」することは可能かもしれませんのが、しかしそうやつて「抽出」された「意味」は、その労働者にとっては、今ここでの飢えの肉体的苦痛に比べれば、ほとんどどうでもいい、無意味なものでしかないはずです。「理解」し「解釈」することを許さない、あるいはその余地をほとんど残さない現実があり、またなんとか「理解」し、辯護合戦的に「解釈」したところで、そうしたものがあまつたく無意味であるような現実があります。

センター軒下でアオカンしている労働者から、親切にも差し出された一枚のバター付き食パンを「ありがとう」といながら一口口に入れて、途端にその酸っぱさと臭気に「ウツ」とむせかえり、吐き出すことができず、しかし「おつちやん、これ腐ってるよ」とはどうしてもいえず、そうかといつてすぐには飲み込むこともできずに、そのばかばかしくも惨めな「対話」状況で、「理解」し「寄り添う」ことの無意味さと無力さを痛感させられたこともあります。いうまでもなく、ここで必要とされているのは、「体験の共有」やそこからもたらされるかもしけれぬ「対象」の人間的まるごとの理解などではなく、ほんのささやかな食料であり、あるいは一枚の毛布です。失業や飢えや寒さの意味を問い合わせ、また理解しようとすることがまったく無駄だとは思わないのですが、しかし「当事者」の肉体的・物質的な苦痛を捨象した理解は空疎であり、さりとて安易に「体験の共有」などできるはずもない、またするべきでもないとすれば、「参与」し「観察」し「理解」しようとすることに何の意味があるのかと自問したくなるのです。

しかし、大方の社会調査（論）・フィールドワーク（論）においては、そのワーク（調査）の意味を問うことは禁じられています。なぜなら「何のための調査か」「何のためのフィールドワークか」と問うことは、必然的に調査者の状況への何らかの実践的関与を要請することになるのですが、そ

いるのですから、「学問研究のため」「より深い人間理解のため」といった本質的な答えはあらかじめ封じられています。そこで問われているのは、今日明日のためにいかに「役立つか」ということなのです。さらには、「ここに『誰のために』というもう一つのやつかいな次元がつけ加わります。そして、釜ヶ崎には、素朴に「労働者のために」というだけでは通用しない、複雑な社会的・政治的・経済的な利害の絡み合い状況があり、この「誰のために」という問いに答えることも容易ではありません。進行する階層分化によって労働者も一枚岩ではなく、そこに地域住民・商店主・ドヤ経営者・行政諸機関・政治家・政治諸党派、各種労働者組織やボランティア団体・宗教団体・人夫出し業者・暴力団、等々がそれぞれに「当事者」として複雑に絡み合い、そのような釜ヶ崎で、それにもかかわらず否応なく「何のために」「誰のために」が問われるのです。

松田素二と川田牧人は「もはや無邪気に、フィールドで人々と交わり理解しあうと主張することは許されなくなつた。なぜならそれは、強者の狡猾な権力行使だと見抜かれ批判されてしまったからだ」とエヌノグラフィー（フィールドワーク）の置かれている困難な状況を指摘しつつ、こうした困難を克服すべく「共感」と「関与」をキーワードとする「エヌノグラフィー再構築」を提案して、次のように述べています。^⑦

のような関与（参与）は、観察者あるいは理解者として、それを以外の参与を戒めるフィールドワークの暗黙の規範によつて、禁じられているからです。それゆえ、フィールドワークを行うためには、私たちは、参与、観察どちらの極にも偏らなければなりません。アドバイスせざるをえなくなるのです。^⑧

しかしこのような節度ある、フィールドワーカー的姿勢は釜ヶ崎ではほとんど通用しそうにもありません。むしろ、失業と飢えと野宿（アオカン）が、そして路上死さえもが日常的である釜ヶ崎では、狭義のボリティカルな立場の表明をも含めて、不斷に否応なく突き付けられてくる。“Who's side are we on?” という問いかけにたいして、その場その場で応えつつ、「見るまえに跳べ」式にコミットする以外に「見る方法はないのです。すなわち、「見る」とこと「行うこと」とが一切の媒介項なしに直結しているのです。「一步距離をおいた関与detached commitment」などとすまして、いれば、そのような調査者はただ単に無視されるだけか、へたをすると西成署の刑事などとまちがわれて追い出されかねません。すなわち釜ヶ崎では、調査者は不斷に、「何のための調査か」「何のための理解か」という問い合わせを突き付けられるのです。しかもこの問い合わせはきわめてプラクティカルな文脈で問われて

……これまでの人類学的なフィールドワークには、対象社会を客観的に分析し、実証的に記述することが求められてきた。そこにおいては、調査する者やされる者は、社会に対しては受動的で、積極的に発言したり行動することは想定されなかつた。それが客観的中立的な科学的営為と見なされてきたからだ。しかしこれからのエヌノグラフィー的営みは、社会に対しても積極的に関与し参加することを忌避しないものになる。フィールド社会が直面する難問に対しても、「よそ者」として距離を置くのではなく、さまざまなかたちでそこに自分自身を投企し、その絡み合いを記述するエヌノグラフィーが登場するのである。

「対象社会を客観的に分析し、実証的に記述」しようとする願望が、却つてフィールドワークから社会的なものを締め出し、その結果それが解釈と理解という多分に独りよがり的な虚構のなかに自閉してしまつたという、現在の多くのフィールドワークが陥つてゐる危機的状況に対し、松田と川田は、フィールドワークという認識実践を直接的にフィールドにおける社会的・政治的実践と接合させようと提案しているのでしょうか。松田と川田のそのような提案に共感を覚えながらも、しかし同時に、私はそのような試みが不可避的に逢着せざるを得ないもうひとつの困難さが気に懸かつてもいます。すな

わち、実践的に関与することを避けての認識は不可能であるとしても、それでは逆に「正しい」認識を導く「正しい」実践はいかにして可能なのだろうか、ということが気に懸かっているのです。なぜなら、釜ヶ崎のような錯綜した政治と利害の絡み合いの状況のなかでは、問題は「フィールド社会が直面する難問」といったように、白黒はつきりとは弁別できず、むしろ誰かにとつての問題は別の誰かにとつての利益という状況があたりまえであれば、認識の実践への接合もまた必然的に問題含みのものとしてしかありえないと思えるからです。

たとえば、アオカンせざるをえない高齢日雇労働者が増加すれば、ドヤ経営者たちはめざとく、「福祉マンション」へとその看板を付け替え、困窮日雇労働者を生活保護受給者としてそのひと部屋三畳の「ドヤ式マンション」に囲い込んで、自らの家賃収入の安定確保を図ろうとする、といった状況のなかで、「野宿者に生活保護を」という実践は果たして「正しい」のだろうか、それともそうした欺瞞的な福祉マンション（と生活保護）を拒否するのが「正しい」のだろうか、あるいはまた、国と自治体が推し進めようと計画している「ホームレス自立支援法」体制は、ホームレスの隔離と抹殺の体制であるとして拒否するのが「正しい」のか、それとも労働者の運動が勝ち取った成果として積極的に（あるいは「やむなく」）活用するのが「正しい」のか、このような相互に対

判の声」として書き留めた、次のような「声」は、釜ヶ崎での社会学」が準拠すべき「正しい」場のありかを示唆しているのではないかと考えています。

〈お前ら、調査や研究やいうてなにぬかしてけつかんね！　お前らに、ワイラの本当のことがわかつてたまるけエ。ワイラはワイラの甲斐性で勝手に生きてるんや。ほつといてんか。ケツタくそ悪い。見世モノとちがうねんで。調査やなんやいうて、今までイジり倒して、ええことしてくれたことあらへんやないか。あんたら、夏休みやいうのにご苦労はんなことでんなあ。ご苦労ついでに一パンここに住んでみはつたらドナダイダア〉

そして、このような「单刀直入的批判の声」に対峙しうるような「釜ヶ崎での社会学」を構想し実践すること、それが現在の私にとつての課題なのです。

注①市村弘正（一九九二）『標識としての記録』、日本エディタースクール出版部、九頁

②西澤晃彦（一九九九）「寄せ場のエスノグラフィー」を書く、青木秀男編著『場所をあける 寄せ場／ホームレスの

立し合う複数の「正しさ」に直面して、研究者・調査者は如何にして自らの実践的「正しさ」を確認して「自分自身を投企」すればよいのか、というさらに難しい問題に直面せざるを得なくなります。調査のためのフィールドへと自己完結的に閉鎖された空間における「正しさ」が自己欺瞞であるとすれば、フィールドを人々の具体的な生活と実践の「現場」へと開いていったときに現れてくるのは「正しさ」の不確定性であり、その決定の困難さという現実です。むしろ、実践と遮断された調査研究が自己欺瞞的にではあれ身にまとつていた中立性や客觀性の装いが剥がれたぶんだけ、その困難さはよりあからさまで大きなものとなる、とも予想されるのです。

「釜ヶ崎での社会学」は、なんとかして人々の生活の現場のどこかに、自らの「正しさ」の準拠点を見い出さなければなりません。洗練された理論や最新鋭の調査技法も、このよくなな場の確保を抜きにしては無力であり、あるいは自己欺瞞的まやかしに自足する以外にないのでないかと、ずつと思はれらされてきました。はたして、そのような特權的な場は存在するのか、存在するとすればそれはどこにあるのか、このことが真剣に考察される必要があります。もちろん、現在の私にそのような場のありかがおぼろげにでも見えていると、いうわけではまったくないのですが、しかしそれでも、たとえば、かつて仲村祥一が釜ヶ崎の「バラックの住人たちの、しばし酔いにまかせてやつと口走りうる、あの单刀直入的批

社会学』、松林社、一一二頁

③市村弘正（一九八七）『名づけ』の精神史』、みすず書房、九七頁

④西澤晃彦、同上、一〇七頁

⑤佐藤郁哉（一九九二）『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』、新曜社、一四五頁

⑥松田素一・川田牧人（二〇〇一）「エスノグラフィーの世界へ」、松田素一・川田牧人 編著『エスノグラフィー・ガイドブック』嵯峨野書院、一五頁

⑦松田素一・川田牧人、同上、一六頁

⑧仲村祥一（一九六七）『社会体制の病理学』、汐文社、一六六頁

（しま かずひろ・大阪市立大学大学院創造都市研究科教授）

編集後記

『ソシオロジ』の編集委員として、投稿論文へのコメントを書き、編集委員会で討論することは、労力がかかる以上に査読者の力が問われる大変な作業です。しかし、毎回刺激的な論文を真っ先に読みますし、編集委員会の度に斬新で奥の深いコメントにも出会えますので、ある種贅沢な仕事だとも思っています。

さて、査読を数回経験して自省的に考えることは、調査資料による論文の真骨頂はどこにあるかということです。私もライフィストリー資料などで論文を書きますが、正直なところ二万字程度で内容ある論文にすることは苦労しますし、理論系の論文と同じ土俵で勝負するのは大変です。書き言葉と話し言葉の密度の差とでも申しましようか。しかしもちろん、調査を主とする論文でも唸るような論文にも出会います。それは、何よりも「調査対象の持つ力」とその持ち味を生かす著者の展開力にあると思います。「調査対象の持つ力」とは、その対象が従来の研究になかった視点や知見を呈示できる可能性を潜在的に備えていること、とでも申しましようか。たとえば、五年前の大学院ゼミである留学生がカザフスタンにおける朝鮮人農民の「請負耕作」について報告しました。報告が終わると矢継ぎ早の質問が続き、教室はしばし興奮の渦に包まれました。

このような対象を見つけることは基本的には研究者の力でしょうが、大学院生にとっては「偶然」の場合もあります。しかし、報告しごとんと貰い論文を書くなかで、それは偶然でなくなり、その対象とともに本人も育っていくことが出来るのではないかでしょうか。地道なフィールドワークに励み、調査対象の持ち味を生かせるような力を養うことが何より大事だと痛感しています。

既存の概念や流行りの概念に当てはめ綺麗に説明する論文ではないく、「調査対象が語りかけてくる」ような論文に真っ先に出会えるのを楽しみにしています。

本号から細辻恵子さんが新編集委員として着任され、同時に、担当委員会の事務担当として右田裕規さんが新たに就任されます。よろしくお願ひいたします。なお、次回の投稿締め切り日は、九月三〇日（必着）です。

編集委員

進藤 雄三（大阪市立大学）

片桐 新自（関西大学）

川端 亮（大阪大学）

三上 剛史（神戸大学）

對馬 路人（関西学院大学）

蘭 信三（京都大学）

斎藤友里子（奈良女子大学）

細辻 恵子（甲南女子大学）

ソシオロジ

147号

〔頒価〕一五〇〇円

一〇〇三年五月三十一日

編集／ソシオロジ編集委員会（代表 進藤 雄三）

社会学研究室内（振替・〇一〇七〇一五一二三四〇六）
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部

（連絡・文学部社会学資料室）
電話 〇七五一七五三一七五一

FAX 〇七五一七五三一八三六

発行／社会学研究会

製作／行路社（〇七五一七二三一七二五二）
〒606-0098 京都市左京区上高野沢瀬町一四一五六